慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『ジャップの収容所』紹介：第VIII部
Sub Title	Jap camp : translation and annotation of selected interviews with citizens of Owens Valley : part VIII
Author	池田, 年穂(Ikeda, Toshiho)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	2007
Jtitle	共立薬科大学雑誌 (The journal of Kyoritsu University of Pharmacy). Vol.2, (2007. 3) ,p.65- 81
JaLC DOI	
Abstract	During WWII, some 110,000 Japanese-Americans, two-thirds of whom were American citizens, were interned in ten 'Relocation Camps.' First settled and the most famous, Manzanar camp was constructed in Owens Valley, California. So far, quite a few interviews with Japanese-American internees have been conducted. It seems, however, to be rather difficult to find documentation of interviews with ‘ordinary’ Caucasians who lived in Owens Valley during the period. The California State University Fullerton Oral History Program, officially inaugurated in 1967, keeps the tapes and its documentation of nearly 2,000 interviews. As to Japanese evacuation and relocation, Professor. Arthur A. Hansen and his staff began to concentrate on it in 1973. Their efforts inevitably included the interviews with Caucasians living in Lone Pine and Independence, both situated in Owens Valley and only several miles from Manzanar camp. The text used for translation is Camp and Community: Manzanar and the Owens Valley, 1978 & 2004, CSUF. The title of the book was originally Jap Camp and was changed to the title above due to opposition and charges from a group of Japanese-American militants. A couple of interviews will be introduced in this article. One interview is with a homemaker who was from Los Angeles and the other with a male automobile dealer. When the war broke out, they were both in their mid-thirties. Their surname was Miller, which is coincidental and does not mean they were husband and wife. Readers might refer interest to another book, Roger Axford, Too Long Silent: Japanese-Americans Speak Out, 1986, which contains interviews with Japanese-American internees and whose translation was published by me in 1991.
Notes	著書・訳書
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=jkup2007_2_065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ジャップの収容所』紹介

—第Ⅷ部—

Jap Camp—Translation and Annotation of Selected Interviews with Citizens of Owens Valley

—Part Ⅷ—

池田　年穂
Toshiho　IKEDA

During WWⅡ, some 110,000 Japanese-Americans, two-thirds of whom *were* American citizens, were interned in ten 'Relocation Camps.' First settled and the most famous, Manzanar camp was constructed in Owens Valley, California. So far, quite a few interviews with Japanese-American internees have been conducted. It seems, however, to be rather difficult to find documentation of interviews with 'ordinary' Caucasians who lived in Owens Valley during the period.

The California State University Fullerton Oral History Program, officially inaugurated in 1967, keeps the tapes and its documentation of nearly 2,000 interviews. As to Japanese evacuation and relocation, Professor. Arthur A. Hansen and his staff began to concentrate on it in 1973. Their efforts inevitably included the interviews with Caucasians living in Lone Pine and Independence, both situated in Owens Valley and only several miles from Manzanar camp.

The text used for translation is *Camp and Community: Manzanar and the Owens Valley*, 1978& 2004, CSUF. The title of the book was originally *Jap Camp* and was changed to the title above due to opposition and charges from a group of Japanese-American militants. A couple of interviews will be introduced in this article. One interview is with a homemaker who was from Los Angeles and the other with a male automobile dealer. When the war broke out, they were both in their mid-thirties. Their surname was Miller, which is coincidental and does not mean they were husband and wife. Readers might refer interest to another book, Roger Axford, *Too Long Silent: Japanese-Americans Speak Out,* 1986, which contains interviews with Japanese-American internees and whose translation was published by me in 1991.

緒言　CSUFのオーラルヒストリー・プログラムについて

二十世紀に入って「録音」という技術が誕生したお陰で、インタビューが社会学的研究の重要な武器の一つとなった。

カリフォルニア州オレンジ郡に位置するカリフォルニア州立大学フラートン校（ＣＳＵＦ）のオーラルヒストリー・プログラムは、1966 年に講義形態として始まり、翌 1967 年に公的に発足している［山倉明弘は、『史學』第六七巻、第二号（1998 年 3 月）の 27 頁で、下記のように述べている。——日系米人の体験に関するオラルヒストリー採取が一九六〇年代に始まり、七〇年代にはいくつか

優れた研究が発表されたというものの、一九八〇年代までは強制収容体験者自身の忌まわしい過去を忘れたいという抑制のおかげでオラルヒストリー採取の作業はそれほど進まなかった。その流れが劇的に変わるのが、一九八〇年代である。アーサー・ハンセンはカタルシスとなった出来事として、（一）戦時強制収容は米国政府の主張してきた軍事的必要性でなく人種偏見、戦争ヒステリー、政治的指導性の欠陥が原因であったという一九八二年のバーンスタイン委員会報告、（二）その報告に基づいてバーンスタイン委員会が一九八三年に行った国家謝罪と一人二万ドルの賠償の勧告の二つを挙げた。それ以来、続々とオーラルヒストリー採取とそれを基にした研究が進んでいる。．．．池田註］。ケースによっては 20 時間にまで及ぶ 2,000 人近い個人とのインタビュー、延べにして 3,500 時間以上のテープが保管されている上、48,445 頁の文書として記録されている。インタビュイーらのインデックスも、504 頁にのぼる Shirley E, Stephenson, *Oral History Collection*, 1985（以下ＯＨＣと略記）としてまとめられている。

その中でもとりわけ筆者の関心を惹くのは、1972 年にアーサー・Ａ・ハンセンを長としてから、より精力的に進められる事となった、第二次大戦中の日系米人強制収容についてのインタビュー（『エスニック・スタディーズ』部門の中の「日系米人史」プログラムに含まれる）の数々である。筆者の調べでは、インタビュイーは 140 人（同席者は除く）、インタビューの時期も 1966 年から 1984 年にまたがっている。因みに年度毎、性別、日系かそれ以外かの別については下のようになる。

1966 年　6 名、　1968 年　1 名、　1971 年　6 名
1972 年　9 名、　1973 年 51 名、　1974 年 13 名
1975 年　3 名、　1976 年 17 名、　1977 年　1 名
1978 年 16 名、　1979 年　2 名、　1981 年　3 名
1982 年　3 名、　1983 年　4 名、　1984 年　5 名
（不詳 1 名、1981 年 3 名の内 1 名は 1982 年にもインタビューを受けている）

男　86 名
女　53 名
（不詳　1 名）
日系　　90 名
非日系　50 名

ユニークな点は、当然と言えば当然と思えるが、日系米人のみでなく白人（コーケイジァン）、それも強制収容に直接には関わっていなかった一般市民へのインタビューが多数含まれている事である。第二次大戦中 10 あったリロケーション・センターの内、最も名高いのは、最初のセンターでもあったマンザナーであろう（それに次ぐのが、合衆国政府への「不忠誠者」を中心に再組織されたツールレークかと思う）。マンザナー収容所が事前の予告もないまま建設された地元のオーウェンス・ヴァレーの住民、ほとんどはそれ迄日系米人に関心すら抱いていなかった住民の反応をうかがうのに最適なインタビューが、無論インタビュイー各々の収容所や被収容者への意識や関わりにはかなりの深浅がありはするが、このＣＳＵＦのオーラルヒストリー・プログラムのコレクションの中にいくつも見出し得る。

ことオーラルヒストリーについては、最新のものが最善とは限らない。筆者も数次にわたり日米加三国でオーラルインクァイアリーを試みてきたが、年月と共に体験者が物理的に存在しなくなったり、知的に衰える例は多い。また、後年になって種々雑多な情報や知識が入ったものをあたかも自らの体験のように錯覚したり、自分の経験やその折の感覚を自分の人生のパースペクティヴの中にではなく歴史のパースペクティヴの中に過度に整理して配列したり「合理化」したりする事も、ある程度は避けられない。また、高齢者によく見られるが、信憑性を高めようという意識からか、年月日等ディテールに非常なこだわりを見せる事もある。但し、インタビューはインタビュイーの話の矛盾を指摘する事に目的がある訳ではないので、裏付けや訂正のないまま録音されていく事になる。更に、インタビュアーが白人であるか日系であるか、はたまた日本から来た研究者であるかにより、インタビューの内容にニュアンスの差が生じる可能性も高い。勿論、インタビュアーの側の視点や態度もインタビューの成否に影響を与える。完全にニュートラルなインタ

ビュアーというものは存在しないが、時として自分の歴史理解やステレオタイプにとらわれて、インタビュイーを誘導したり、質問の内容を自主規制する事もあり得る。これは1991年に筆者が翻訳を刊行したRoger Axford, *Too Long Silent: Japanese-Americans Speak Out,* 1986、邦題『リロケーション―日系米人強制収容の証言』西北出版、の「訳者あとがき」にも記した事だが、一世の中には、トラウマチックな体験を過小評価しようとする心理メカニズムを見せる者もいれば、社会学的なレファレンス・グループの求め方によっては『キャンプ生活はヴァケーションじゃった』と表現する者もかなりいたが、一般にそうした発言は日本人研究者のインタビュアーには好まれない。

日系米人強制収容について言えば、「公民権運動」という全米的な分水嶺を越える前と後では、ターミノロジーさえ異なってくる。その一つが「ジャップ」という呼び方である。ジェシー・ギャレットとロナルド・ラーソンは1977年、第二次大戦中にオーウェンス・ヴァレーの住民だった白人達（1人、夫妻の内の妻の方が中国系）へのインタビューを20抜き出して *Camp and Community: Manzanar and the Owens Valley* として刊行した。ところが、これは元々*Jap Camp*,『ジャップの収容所』というタイトルであり、そのタイトルで広告もうたれていたものが、前年1976年に一部の日系市民活動家からの強硬な申し入れにより変更されたものである。その顛末自体極めて興味深く、我が国におけるパラレルな問題と重ね合わせる事も出来ようが、詳細の紹介は他の機会に譲る事とする。

合衆国の60年代は、公民権運動、ベトナム反戦運動、反公害運動の三つの運動で記憶されるであろうが、ジャップという言葉を用いるのは（ニップも同様）その時代背景の中では当然忌避されるようになっていた。それでも、例えばアグニュー・メリーランド州知事の1968年の副大統領選挙キャンペーンの途中での日系二世ジーン・オオイシに対する「ファット・ジャップ」発言のように、深刻な「失言」事件もおきている（詳しくは、当事者により、*In Search of Hiroshi,* 1988、翻訳は『引き裂かれたアイデンティティ』染矢清一郎訳、岩波書店、1989年、の中に書かれている）。本稿での「ジャップ」発言については、考察と結語で触れる事とする。

本文

本稿では、男女一名ずつ二名のコーケイジァンとのインタビューを紹介する。

なお、（18）、（19）は、「『ジャップの収容所』紹介」第一部からのインタビュイーの通し番号になっている。二人共に姓はミラーであるが、夫婦ではない。

（18）ポーリーン・ミラー

ポーリーン・ミラーとのインタビュー。Mがインタビュイーのポーリーン・ミラーをさす。Hがインタビュアーのアーサー・A・ハンセン、Bが同じくインタビュアーのデイヴィッド・バータニョーリをさす。インタビューに同席したミラー夫人の夫（ファーストネーム、ミドルネームは不明）は、M氏として表す。

H：ミラーさん、あなたの個人的なバックグラウンドについていくつか質問する事で、インタビューを始めたいのですが。第二次大戦が勃発した時に、あなたは大体おいくつでしたか？

M：35歳くらいだったわ。

H：その前もかなり長い間オーウェンス・ヴァレーにお住まいだった？

M：11年間ね。

H：ローンパインにいらした時には結婚されていましたか？

M：ええ。

H：ご主人は何をなさっていましたか、職業ですが？

M：車の販売店とガソリンスタンドを買ったのよ。

H：あなたが初めてやって来られた時に、ローンパインのことをどう思われましたか？

M：神に見放された土地だと思ったわ。（笑い）でもこの土地に暫くいたら―わたしは都会から来たでしょう、こんな小さな町に来るんで友達みんなと離れたわけだし―そんなに日が経た

ぬ内になじんでしまって、この町がとても好きになったのね。

H：1942 年にマンザナー収容所が出来る前に、日本人、中国人、フィリピン人が、誰かこのローンパインに住んでいたのをご記憶ですか？

M：いいえ。

H：こちらに来られる前に住んでいたところで、アジア系アメリカ人と接触がおありでしたか？

M：ええ、元はロサンゼルスに住んでいましたから、勿論、あちらにはいくらかいましたよ。実際は、たくさんいたわね。

H：個人的に誰かを知っていた事は？

M：それはないわね。マーケットやそんな場所で顔見知りになるというところね。その辺りのあちこちに集まって住んでいたわね。とても良い人達だったわ。

H：とてもたくさんの—何千という数の日系米人を収容するという可能性があることに、いつ頃初めて気付かれましたか？

M：そうね、とても短兵急だったのよ。つまり、だって—戦争みたいだった。それでこんな事が始まって、そうなると落ち着いてそういった事態を考えようともしないものよ。実際のところ、それに気付く前に、彼らはここに来ていたのよ。

H：そもそも、マンザナーにやがて収容所が出来るという噂があった事をご記憶ですか？

M：それはそうよ。噂はあったわ。そして、わたしの言った通り、それに気付く前に、彼らはここに来ていたのよ。

H：どんな類の噂をお聞きになったのですか？　どの位の数の噂がこの辺りに飛び交っていると考えていましたか？

M：分からなかったわね。ほら、気付きもしない噂がたくさんあったのよ。

H：どういう風に噂が発生したかご存じですか？陸軍の工兵が収容所の土地を測量に来たとかそんな事からですか？

M：そこから来たのかも知れないわね。ほら兵隊達が流れ込んできて、町には兵隊の姿がたくさん。そうなってわたし達にも、ここに収容所が造られ、兵隊達はみなそこを見張ったり働いたりしているのが分かったってわけ。勿論、何事も余りにも手早く行われていたので、それがどんな風に起こったのか思い出せないくらいよ。

H：あなたは大都会からいらした。かなりコズモポリタンな所からね。そして、あなたが言われるように、小さな町に越して来られた。小さな町は、えてして、とても田舎風ですよね。田舎風である事を示す一つの点は、住民がよそ者に対して少しばかり疑り深いという事ですよね。ローンパインの住民は、人種の異なったそれほど多くのよそ者が自分たちのコミュニティーに入ってきた事について、どんな反応を示しましたか？　住民はそれについてどう思ったのでしょう？

M：分からないわ。それについて余り考えなかったのじゃないかしら。ただ、その時点で、わたし達がやらなければならない愛国的な義務の一つと考えたってとこかしらね—彼らを受け入れなければならない、で、勿論—分からないわ。戦争や何やかやでわたし達がそれを当たり前ととらえていただけにも思えたしね。戦争なら起きてしまう事の一つに過ぎなかったってわけよ。当然、それを苦々しく思っていた人もいた—ほら、あんな風に人間を閉じ込めてしまうなんてね。それから、勿論、たくさんの人間が日本人嫌いだった。うちの娘はまだほんの子供でね。やっと 4 歳か 5 歳くらいね。そんな子供に、色んなお喋りが耳に入ったので、日本人に対するとっても変な感情が植え付けられたのね。わたし達が一度マンザナーに夕食を食べに行った時に、収容所の中の人達が自分達で育てた素晴らしい食べ物を出してくれたのよ。野菜やなんか全部栽培していたのね。それを並べて見せてくれた訳よ。それで、娘にそれを食べさせる事が出来なかったのよ。娘は、中の人たちが敵だと思っていたのね。口には出さないけどそう思っていたのね。あの人たちは敵だ。だからあの人たちの食べ物を食べちゃいけないってね。娘は、やっと 4 歳か 5 歳くらいだったのよ！　娘はそこに座っていたけど、どうやっても娘に食べさせる事は出来なかった。そんな風

に感じていた人達は、たくさんいたと思うわよ、はっきりとは知らないけど。わたしの考えでは、多かれ少なかれ、収容所を受け入れるのも仕方のない事の一つだと、皆がただ当たり前に感じていたってとこかしらね。

H：どんな悪い噂をお聞きになりましたか？　いくらかあったと言う人たちもいるんですよ。町の中で。そう、パーセンテージに直せば、あなたの感じたところではどの位になりますか？25パーセントが、収容所がここに出来るのに反対していた、それとも10パーセント、いや2パーセント？　それとも．．．

M：いいえ。誰かがそれに反対していたなんて知らないわ。思い出す限りはね。恐らくいくらかはいたんでしょう。でも、わたしは、収容所に反対していた人を思い出せないわね。お話ししている通り、それが義務だからここに収容所を受け入れなければならない、当然の事だと思っていたのよ。収容所に嫌な気分を抱いた者もいたでしょうね。だけど、収容者達はわたし達を悩ましたりしたことはなかったのよ。勿論、収容所の中の人達は外出を許されていなかった。でも、わたし達は中に入れたのよ。わたし達は行って、収容所を見る事が出来た。収容された人達が、全員、どんな風に家から引き離されてこの収容所に送られて来たかを見ると―嫌な気分になったわね。わたしが子供の頃、第一次大戦中に、みんながドイツ人に対してどんな風に扱おうとしていたか、あれやこれやを聞かされていたものよ。だから、それはただ―分からないわね。わたしに関する限り、わたしは若かったし、それがやらなくちゃいけない事だと納得していたから―もし政府がそうしろと言ったら、そうするわよ。それに、年配の人たちは、も少し辛辣だったかもね。それについて、余り語られたって記憶がないのよ。

H：敵意が組織化されたのは、少しも思い出せませんか？

M：とんでもない。まるっきりそんな事はなかったわよ。それに、誰もが、収容所の兵隊さん達には、前とは打って変わって親切にしたわ。兵隊さん達は、家庭で温かく迎えられたし、あの人達はみんな―うちのことを言えば、いつでも二三人よんで夕食をとったり、ただくつろいで貰ったりしたわ。わたし達が会った兵隊さん達は、たくさん太平洋の島々に行っていたのよ。ほら、病気になっていたりしてね。ほとんどの兵隊さん達が、病気になったり怪我をしたりでね。程度の差はあれ戦場には出られないので、ここで勤務をしていたわけよ。それに、調子が悪いというだけの兵隊さん達もたくさんいて―だけど、あの人達も日本人の扱い方はとても良かったわ。

H：私にとって衝撃だった事の一つは、合衆国の様々な所に10のリロケーションキャンプがあった。マンザナー収容所とカリフォルニア北部のツールレーク収容所を除けば、収容者が外出して周辺の町に出かけられた。ところが、ローンパインとインディペンデンスではそうはいかなかった。それをどのように説明されますか？

M：どうして外出して町に来るのが許されなかったのかは覚えていないわ。けど、みんなが話していたのは覚えているわ。思い出せる噂では「いいさ、収容者達はいずれ町にやって来て買い物をしたりするさ」ってね。でも、わたしはそんな風には運ばない事が分かっていました。だけど、わたしにも理由は分からないわね―当局が望まなかったからなのかどうか―実際なかなか大規模な収容所だったから、当局は外出させたくなかったのかも知れません。わたしには分からないわ。

H：収容所の横を車で通り過ぎたことはおありですか？

M：勿論、何度もね。それに、何度も中に入ったわ。お話ししたように、わたしにはあそこで働いている友人がたくさんいたし、姉も働いていたし、それに―つまり、入れたのよ。

H：それじゃ、あなたは収容所との直接のコンタクトがとても多かったんですね？

M：うーん。そうでもないわ。姉や誰かに会いに行っただけだから。それに、これもお話ししたよう

に、特別なフェアー（fair）みたいなものをやった時に三四回ね。手工品や栽培した物なんかを見せていたのよ。収容者との直接のコンタクトはそれだけかしらね。

H：周辺のコミュニティーの住民にとってマンザナー収容所で雇われるのは、まるで当たり前の事でしたか？

M：ええ、姉の働いている事務所ではとてもたくさん働いていたわ。どの位かは覚えていないけど、でもいたわ。幾人かは覚えていないけど、少なくとも8人の娘がいたに違いないわ。それは覚えている。それ以上いた数については思い出せないけど。

H：全般的な経済的影響については如何ですか？　オーウェンス・ヴァレーは戦時中は些か経済的に不況下にあった。ツーリストが通って行くのが少なくなったためかと思いますが。収容所での雇用状況は如何でしたか？　ローンパインの経済を上向きにするのに役に立ちましたか？

M：勿論です。収容所のおかげで経済はとても助かったわ。兵隊さん達は、ほら町に来るのを許されていた、だから当然このローンパインにお金をもたらしたのですから、とても助かったわ。それで、経済の面では、どれだけの数の兵隊さんがいたか知らないけれど、本当にたくさんいたから、当然ローンパインの町は助かったわ。インディペンデンスの町もそうだったでしょうね。

H：あなたのご主人は自動車に関わるビジネスをされていた。そのビジネスに、収容所がそこにあることが影響を与えましたか？

M氏：そうさね。なかったね。我々の商売は殆ど住民相手だったから、それ程影響を与えられたとは覚えとらんがね。鉱山だの色んなものがあったから、我々のビジネスは変わりなかったよ。尤も、他の時に比べてまるで同じというわけではなかったろうね。この町の他の商売は、食料雑貨店も何も、実際潤ったさ。勿論、政府は、たくさんの物資を運び込んださ。でも、収容所のおかげで我々は大いに助かったよ。ローンパインに来る者は誰でも―集団で来るしね―少しは金を費う。兵士達や何かの場合に限っては、役に立ったさ。と言うのも、政府は必要な物の殆どをトラックで運び込んだので、収容所自体からは余り恩恵を受けなかったからなあ。

H：その当時、ローンパインでは、「政府が日本人を甘やかしている。政府は一般の国民には配給になっていた物や食料を豊富に持っている。しかも収容者は明らかにそうしたものを購入する機会がある」というような噂がたくさんあったのではありませんか？

M：その点では、大して覚えていません。けど、連中が捨てたと思われたゴミのことは覚えています。我々には、バターも何も配給制でした。政府は、バターをみんな連中の元に運んで、連中は屡々捨ててしまう。ほら、駄目にしちゃうんですよ。そんなような事が噂されていたわ。わたしが自分で見た訳じゃない。耳にしただけよ。たくさんの人間が実際にそうした状況を不愉快に感じていたと思うわね。

H：1942年12月にマンザナーで起きた暴動のことは覚えておられますか？　恐らく、リロケーションキャンプがいくつもある中で最も有名な（celebrated）暴力事件の例だったと思いますが。そのいわゆる暴動の知らせは、町まで流れ込んできましたか？

M：ええ、町の住民はそのことを知っていましたよ。

H：2名の収容者が殺害されました。収容所の拘置所の前で示威運動があったと思うのですが、そこでいかなる理由があれ―

M：そのことについては微かに覚えているけど、思い出せる事はそれ程ないわね。

H：それでは、暴動や暴力的な示威運動の後で町にさーっと広まった恐怖については、何も覚えておられませんか？　というのも、治安維持のために憲兵を収容所に入れたからですが。

M：それはいくらか思い出せるけど、詳しくはねえ。いえ、思い出せないわ。ジョゼフさんの奥さんならたくさん覚えているんじゃないかしら。町で食料雑貨店をやっているし、収容所で起きている事について色々耳にしていただろうから。

H：あなたは収容所に慣れてしまったというところでしたか？

M：そうそう。収容所の方で何か起きているというだけでした。気にならなかったわね。収容所について考えていた事さえ思い出せないくらいよ。もう言ったけど、あって当たり前の事に思えるものだったわね。

H：この町の住民の間に、戦争が終わって収容所から解放されたら日系米人がこの地域に留まるのでは、という恐れはありませんでしたか？

M：覚えてないわね。考えた事さえ思い出せないわ。みんな家に戻るんだと想像していたしね。他の場所では留まったと聞いたけど、そうじゃないの？　ニューメキシコやアリゾナではそうだったの？　でも、ここでは、誰も留まらなかったと思うわ。

H：あなたはあの収容所が必要だったと思われますか？

M：わたしには答えようがないわ。

H：収容所には敵国民もいたが、3分の2はアメリカ市民だったんですよ。

M：ええ、それはそう。その時には、そんな事を考えないのね。今ではそれが分かるんだけど。あの人達がたくさんのものを失ったのは、とても恥ずべき事に思えるわ。

H：政府は何故彼らを収容したとお考えですか？　そうした行為にどのような正当化があり得ますか？

M：わたしの考えでは、誰が本当のアメリカ人で、誰が日本人か見極めがつかなかったからじゃないかしら。だから、一緒くたにして収容してしまったのね。

H：あなたがアメリカ市民にして抑留されていた者がいた事に気づいた時―戦争が終わってからは、あなたも状況をもう少し広い視野で見る事ができたでしょうから―その事であなた自身の民主的な制度に対する信頼が幾分でも減じるという事がありましたか？　あなたの市民権が、危機的状況にあっては単なる紙切れに過ぎないものになり得ると認めるのは、ぞっとするような事ではありませんでしたか？

M：うーん、そうね。その時点では正しい事だったと思えるわ。お話ししているように、今では、多分正しい事ではなかったと思える。恥ずべき事でした。あの中に収容されていた善良なアメリカ市民がたくさんいました。でも、政府なら自分達のやっている事を弁えている、そんな風に思ってしまうものでしょう。

H：仮に政府が彼らを収容せず合衆国本土に日本軍が侵入していたら、日本人の血を引く者の中には侵略軍を助ける者がいた、そうお考えですか？

M：そう考えるわね。

H：それでは、そうした恐れが、彼らを収容所に閉じ込めるのに関わりがあったとお考えですか？

M：ええ、そう思うわ。

H：この町の住民であれどこか他の土地であれ、日系米人に対するそれ以降の態度はどのようでしたか？　明らかに、彼らは戦前はステレオタイプ化されていた。さもなければ、収容所に閉じ込められなかったという感じも持ちます。でも、戦後はどうでしたか？　軍隊に入った日系米人の果たした役割は、白人など日系米人以外のアメリカ人にどのようなインパクトを与えましたか？　勿論、第二次大戦中に最も多く受勲した442部隊の事を指しているのですが。この事は町の中に広まりませんでしたか、そして幾分―？

M：ええ、そう思うわ。思い出せる事は余りないけど、広まったと思います。ローンパインに関する限り、日系米人に対する敵意のようなものは一度もなかったわ。あなた方はこう推測するんでしょう―「奴らは俺達の敵だから、ここにいて欲しくはない」ってね。わたし達はただこう思っていただけ―「連中はここにいるんだから受け入れよう」ってね。恐らく、わたし達は、彼らの内いくらかは敵だろうと感じてはいた。でも、それでも、善良なアメリカ市民もいると当然感じもしたのよ。でも、判断するのはわたし達のする事ではなかったわね。

H：今年の夏の事ですが、ウォーターゲート事件の

公聴会で、戦時中 442 部隊に属していたハワイ選出の上院議員のダニエル・イノウエ議員が、その場にいた弁護士の一人に「いまいましいちびのジャップ（damn little Jap）」と呼ばれたのは、不快に感じましたか？

M：ええ、とても不愉快なことだったわ。とても素晴らしい若い人なんだもの。それには余り同意できないわね。

H：昨年の春に、マンザナー収容所の跡地に据えられた銘板についてはよくご存じですか？

M：それについては読みました。思い出せないけど．．．わたし達は出かけてそれを見ようとしたんだけど、果たさなかった。でも、それについては読みましたし、ほら古い墓地があった所に行ってみたのよ。尤も、そこをきれいにして銘板を置いてからは近づいた事がないんだけど。

H：この町で銘板に対しての反応は如何でしたか？新聞記事か何か出ていたのを覚えておられますか？

M：新聞に記事は出てたけど、誰かがそれについてえらく活動的だったとは思わないわ。銘板を置いたのは良い事でした。あの頃、わたし達はこの町にいなかったから、何が起きたのかははっきりと思い出せないけどね。でも、反目があったとは思わないわよ。

H：銘板の中の表現にいくつか議論を呼ぶものが含まれています。ロサンゼルス地区のいくらかの人達を動転させたものですが。それらについてのあなたの反応を知りたいのですが。一つは、収容所が「強制収容所」（concentration camp）と呼ばれている事。今一つは、収容所の存在が「ヒステリア、人種差別及び経済的搾取」（hysteria, racism, and economic exploitation）の組み合わせによるものだと非難されている事です。まず第一に、収容所は「強制収容所」だったとお感じですか？　マンザナーは強制収容所だったというのは、正しい言葉遣いだった、そう思われますか？

M：強制収容所だったという感じがするわ。

H：強制収容所について正確に言って何を思い浮かべますか？

M：そう、マンザナーがそうであったようなものよ。あの人達を収容して閉じ込めたんですから。囚人のようには扱われていなかったけど、フェンスに囲まれていたし、外出を許されていなかったんですから。といっても私の意見よ。良く分からないわ。

H：それでは、その部分はお気に障らないんですね。収容が「ヒステリア、人種差別及び経済的搾取」によって引き起こされたという非難については如何ですか？

M：多分そうだったんでしょう。

H：三項目すべてについてですか？

M：三項目すべてについて、多分ね。

H：外国籍の日本人は収容されたが、ドイツ人、イタリア人は収容されなかった事については如何ですか？　みな枢軸国側でしたが。こうした差別的な状況がどうして生じたとお考えですか？

M：さあ。分かりません。さっぱりだわ。

H：それが多分、あなたが銘板に記載された事に同意された「人種差別」につながるんですね？

M：そうそう、多分ね。

H：収容所の建設前に、陸軍はオーウェンス・ヴァレーに、10,000 人でなく、100,000 人の日系米人を連れて来るという噂を、何か耳にされませんでしたか？　そうした場合の結果について、何か狂気じみた噂をお聞きになりませんでしたか？

M：多分ね。思い出すことは出来ないけど、小さな町の噂がどんなものか分かるでしょう。多分流れていたんでしょうけど、思い出すことは出来ないわね。だけど、恐らく噂はあったでしょうね。

H：オーウェンス・ヴァレー全体でのみんなの態度については何かお耳に入っていましたか？私共はある方にインタビューしたんですが―これは信頼できる情報源で、マンザナー収容所の以前の副所長だったロバート・ブラウン氏なんですが―インディペンデンスにおいては、僅かの住民を代表していただけのようですが自

警団があって、マンザナーに収容されている日本人が侵入して来る可能性を防ぐために民兵隊を組織したという事があったと。それについて何か耳にされた事は？

M：覚えてません。あったのかも知れないけど、思い出せないわ。今現在では思い出せないわ。

H：デイヴィッド・バータニョーリがあなたにおうかがいしたい事がいくつかあるようですので、インタビュアー役を譲ります。

B：あなたはご主人のビジネスには少しでも関わっておられなかった？

M：ええ。全然ね。

B：マンザナーに収容された最初の収容者のグループが乗ってきた車列の事を覚えていらっしゃいますか？　1,000 人くらいいた、まことに長い車列でした。

M：ええ、覚えているわ。

B：それらの車はオークションで売られました。ご主人がそれについて何か仰っていたことは？自動車ディーラーのビジネスをしていたんですから、そうした車を買うチャンスを活用したんでは？

M：いいえ、しませんでした。

B：なるほど。お出かけになったマンザナーでのフェアーには、あなたお一人が招かれたんですか？　それとも町中が招待された？

M：町中よ。行きたい者は誰でも招待されたのよ。

B：たくさんの住民が出かけましたか？

M：ええ、あそこの食堂、どういっても良いけど、食堂は満員でした。みんなが来たのはインディペンデンスや—

B：人数を教えて下さいませんか？　ほら、1,000 人か、500 人か、100 人か？

M：200 人てところね。確かにそのくらいいたわ。勿論、何回も開かれたし。わたしの行った時は—

B：一日がかりのイベントでしたか？

M：ええ。収容者達が何をしていたか、何をつくっていたかを見て欲しいわね。で、わたしはそれをフェアーと呼んだけど、多分他の呼び方をした方が良いんでしょうね。それで、色んな展示物を見てから、そう、食事ね。食事は収容者が用意してくれたんだけど、自分達で育てた野菜なんかを見せてくれたわ。収容者達がそうした事をやり遂げているというのが、そのフェアーが開かれた趣旨だったわ。目新しい物の品評会みたいなものだったわ。

B：それは日系米人達自身が企画したものでしたか？　それとも、収容所当局が？　そもそも日系米人達がやって来て宣伝したんですか？

M：想像だけど、当局が、収容者達がやっている事を見せていたのよ。覚えていないけど、わたしの想像ではね。

B：最後にもう一件大切な点を。戦時中、日系米人部隊が、つまり 442 部隊ですけど、組織されてから、日系米人の兵士達の幾らかが、町を通ってマンザナーの両親を訪ねました。あなたは彼等と接触を持ったり、彼等がローンパインにいる間どのように扱われていたか耳にされたりしましたか？

M：いえ、覚えてないわ。わたしの記憶では、それについて思い出したのは唯一回、彼等がテレヴィの番組でその事を語った時ね。三四ヶ月前に『バックトゥーマンザナー』とかいう特別番組をやったのよ。その番組では、町を通り抜けて行った兵隊さん達を見せていたわね。でも、わたし自身は誰一人通り抜けてゆくのを見かけた覚えがないのよ。

B：ばったり会うこともなかったんですか？

M：ええ。いずれにせよ、覚えていないのよ。

B：ご自宅に招いてもてなした兵士達は、収容所の事をどのように話していましたか？

M：うーん。収容所について余り話した記憶はないわね。向こうも、その事はあまり話さなかったわ。

B：兵士達が関わった何らかの事件についてご記憶は？

M：ないわね。兵隊さん達は余り話さなかったし、推測だけど、話すべきじゃないとされていたんじゃないかしら。そう、兵隊さん達は余り話さなかったわね。彼等は外出して暫し町中で過ごせるのをただ喜んでいた、自分達の仕事につい

て語るのには実際に関心がなかった―そう思うわ。収容所に関する事は何にせよ殆ど語ろうとしなかった。それについて思い出そうとするには、わたしにとっては長い長い年月が経ってしまったわ。（笑い）わたしは、余り記憶力が良くないのよ。

H：おかげさまで、とても素晴らしいインタビューになりましたよ。カリフォルニア州立大学フラートン校の日系米人オーラルヒストリープロジェクトを代表して、あなたのご協力に御礼を申し上げます。

M：どういたしまして。

（19）ヒューバート・E・ミラー

ヒューバート・E・ミラーとのインタビュー。Mがインタビュイーのヒューバート・E・ミラー、Bがインタビュアーのデイヴィッド・バータニョーリをさす。インタビューに同席したミラー夫人（グラディス・V・ミラー）は、M夫人として表す。

B：ミラーさん。日系米人がマンザナーに着いた時に、彼らが所有していた車がどうなったか教えて頂けませんか？

M：私の記憶するところでは、恐らくは少なくとも2マイル、ローンパインからマンザナーまで日本人のものだった車が並んでいたよ。どのくらい長く、その車が収容所に置かれていたか覚えていないが、3週間から1ヶ月後には競売に出したかな。

B：政府が競売を行った？

M：そう聞いたんだがね。政府の査定人がやって来て、日本人の所有する車を査定してからそれを売りに出した。と言うより、いくらだろうが、査定した値を、日本人に払ったんだよ。聞いたところでは、車をものすごく安く査定したし、余り宣伝もされなかった。競売が終わるまで、知っている人間は殆どいなかったとさ。

B：その頃は、ローンパインのシボレーの販売店で働いておられたんですね？

M：　その通りさ。

B：それでいて競売の事を耳にされなかった？

M：わしらが知ったのは、競売が終わってからさ。覚えてるところじゃ、町のフォードのディーラーが、一二台買ったな。やっこさん、競売の噂を嗅ぎ付けて一目散さ。ローンパインからマンザナーまでたった6マイルだよ。

B：その人は、どんな風にして噂を耳にしたか言ってましたか？

M：いいや。恐らく、誰かが収容所に出かけていて、多分それから町に戻って競売の事を話したんだろう。連中はたくさんの車を売ったそうだし、残りはブルドーザーで潰してしまったとか聞いたよ。本当かどうかは知らん。わしが直接行って見たんじゃないが、そんな風に耳にしたんだよ。

B：その当時、収容所が、ローンパインの町の発展に影響を与えたとお考えですか？

M：いいや。

B：少しは経済を活気づかせた筈ですが。

M：そう。とても僅かだったろうがね。というのも、何も彼も不足していたからなんだよ。例えば、ショーティーと呼んでおった地元でパン屋を経営していた男がおったが、日本人に対して強い反感を持っておった。マンザナーで働いている白人が町にやって来て、収容所に入っている日本人の友達のためにパンを買っていこうとする。ショーティーは、その人達が日本人の代わりに買い物をするのだと気付くと、その連中を閉め出してしまったものさ。どうしても、売ってやらんかった。わしの覚えているところでは、砂糖が足りなかった。地元の客に売るだけの量のパンや菓子しかなかったから、日本人に少しでも売ってやろうなんぞと考えもしなかった。ショーティーは、そう結論を出しておったんだな。

B：そうした事―単なるやり過ぎだけをさしているんじゃありませんよ―が町ではいくらも起きていたんですか？

M：どんな時にも起きる事だが、ひどい敵意や悪感情を持っていた者もいくらかおった。だけど、一般的に考えて―何にせよローンパインの住民は―収容所をハプニングだと受け止めて敵

意はなかったな。ゴムが集められておったんで、わしらも鉄道の駅にタイヤを積み上げたものだ。日本人を駅にやって来させて、タイヤを貨車に積み込ませていたな。10 人か 20 人かの日本人に白人の監視兵が一人ってところだった。日本人が脱走するとか恐れていた人間はおらんかった。日本人は、石油備蓄タンクのそばで働いておったから、マッチを擦ってそこに投げ入れるとか、やりたかったら爆発させるとか出来ただろうね。しかし、そこでも何も起こらなかった。だから、住民が神経質になっていたなんて事は、これっぽっちも言えんと思うよ。

B：このローンパインにどのくらい住んでおられますか？

M：1935 年にやって来たんだよ。

B：インヨー郡の全人口を上回る 10,000 人もの日本人をマンザナーに収容しようとしていると分かって、初めに何を考えましたか？

M：個人的には、心配はしとらんかったよ。日本人は軍の監視下におかれるだろうと考えていたし、そこに来ることになったんだしね。日本人がここに大挙してやって来るといっても、誰も悩んだりはせんかったよ。

B：あなたご自身は日本人と接触を持たれましたか？

M：いいや。わしは、収容所には 3 度しか入らなかった。インターステート電話会社のトラックが、収容所の中で故障しちまった。それまで、収容所に足を踏み入れた事はなかったがね。ま、たまたまその会社の旧式の T 型フォードの修繕トラックが出払っていたんだよ。わしが収容所に入ってみると、連中はわしが銃を持っていないか身体検査をしたんだ。わしは連中に、銃など持っておらんし、その会社のために、エンジンをかけに来たんだと言ってやった。ところが、連中は、監視兵を連れて行かねばならんと言うのさ。馬鹿げてると思ったがね。監視兵をトラックに乗せて走ったが、こう尋ねてみた。「どうなってるんだね？　この辺り、えらく張りつめた雰囲気じゃないか」1942 年だか 1943 年だかの 12 月 7 日で、日本人は日本の国旗を掲揚したがったが、許可されなかった。それで、結構な小競り合いが起きたのさ。噂では、監視兵の一人が、ライフル銃の床尾で、収容者の一人の口のところを叩いたんだとさ。武器庫に行こうとして、脚を撃たれた収容者がもう一人いたとも聞いたがね。

B：1942 年 12 月に起きた、マンザナー暴動の日だったのではないでしょうか？

M：収容所で暴動の起きたすぐ後、翌日だったよ。だから、おさおさ油断なくしていたんだろうな。

B：その日は、監視兵はみんな武器を携行していましたか？

M：ああ、ライフル銃をな。監視兵がトラックに乗り込んで来た時に、その兵隊も銃を持っていたよ。

B：収容所に入った残りの 2 回は、どんな機会だったのですか？

M：一度は、隣に住んでいたディック・カラスコと一緒だった。ディックがウエスタントラックラインズの運転手をしていた時に、農産物や肉を収容所に輸送していたんだな。とある日曜日に、彼のトラックに便乗して、あそこにあのでかい保冷庫を下ろすのを見に出かけただけなのさ。

B：あなたが実際に収容所と持った接触から、日系米人の収容者に対してどのような意見を抱くようになりましたか？

M：合衆国で生まれた日系人の事かい？

B：収容所にいた人達です。

M：うーん、ジャップに手を貸した者もいくらかはいたかもな。でも、多くの者は、きっと手を貸さなかったろうよ。例えば、兄貴がモンテベロに住んでいるんだが、マンザナーに収容された男と知り合いだったんだな—その男の名前は知らないが、兄貴は、長い間その男と知り合いだったんだ。その男は市場に出す農作物をつくっていたが、マンザナーに送られることになっていた。で、車を持ち込んではいかんというので、自分の車を兄貴に売ろうとした。この男は、父親や兄弟二人と喧嘩しておった。自分はここ合衆国で生まれ育ち、学校にも通い、結婚もしたし、家族もいる。それで、父親に向かっ

て、日本に行く気など金輪際ないと言ったんだ。日本に親戚がいるのは分かっておったが、日本人の習慣や生活様式については知らんかった。ここがその男の故国で、だから彼は留まってマンザナーに入ると言い張った。つまりは、連中の内いくらかはこの国に留まることにしたし、我々のやり方を信じておったわけだ。それから、日本人が攻撃してきたら、手を貸しただろう人間もいくらかいたのも確かだろう。

B：形を変えた質問ですが、日本人を全員収容したのが正しかったと思っていますか？

M：いいや、それが正しかったと思った事は一度もないね。

B：ヨーロッパに出陣した日系米人部隊442部隊についてお聞きになったことはおありですか？

M：ああ、ウィリアム・バウアーから聞いたな。同じ中隊かどうか分からんが、バウアーが戦争から帰ってきて、我々はどこかで集まりを持ったんだよ。誰かが、日本人について手厳しい事を言ったんだな。バウアーは、あっちで日本人の兵隊達と付き合いがあった—あんたが話しているのと同じ連中かも知れんな—で、バウアーの意見では、日本人のやってのけたことから考えて、日本人に勇敢さでかなうのは殆どおらんという事だ。

B：それでは、442部隊は、その当時のあなたの意見を好ましいものにした？

M：そう、アメリカ人だった人間には好感情を持ったな、うん。わしらの生活様式と国家に賛成なら、日本人に悪意などこれっぽっちも持たんよ。

B：ミラーさん。あなたは、1973年の4月にマンザナー収容所跡に設けられた記念の銘板には通じておられますか？

M：いいや、知らんな。遠くから眺めたことはあるんだが。わざわざ行って読んだことはないな。

B：銘板の二語が、議論をよんだのですがね。それで、マンザナー収容所のような収容所が強制収容所（concentration camp）であると述べている部分へのあなたの反応はどうかとお尋ねしたいのですが。あなたは何度か収容所に足を踏み入れ、収容所の展開についてもよく知るようになった、その限りで、あなたは、マンザナーは「強制収容所」だったという表現に納得されますか？　あなたは、マンザナーが、あなたの感じる強制収容所であったとお考えですか？

M：あんたが強制収容所をどう定義しているのか分からないのでな。確かに連中は、あそこに収容されたんだが、わしには、強制収容所の定義が分からんでな。強制収容所ではどんな事が起こり、実際に何を意味しているかだがね。わし自身は入れられた事がないから、何とも言い様がない。わしが聞いた呼び名は、いつでもマンザナー収容所（Manzanar Internment Camp）だったよ。

B：銘板の下の方にある、「ヒステリア、人種差別、経済的搾取」（hysteria, racism, and economic exploitation）がないまぜになって収容所が出来たのだとする表現にもまた議論が色々とあるんです。あなたは、その表現が、当時の状況の公平な評価だとお考えですか？

M：どう答えていいのか分からないな。うん、部分的には、人種差別だったろうさ。

B：どうやら、収容所を閉じた後、たくさんの物が売りに出されたらしい。そうしたセールに加わりませんでしたか？　例えば、何かを買ったとか？

M：ああ、家内とわしで、そこで売りに出された建物を一軒買ったよ。白人が住んでいたと言われていた—日本人の住まいではなかったよ。ローンパインの様々な人間が、何軒か買ったよ。半分にして、その俱町に持ってきたんだ。ウイロゥモーテルが3軒、エルマー・シュレーダーが買ったランチモーテルが2軒買ったかな。ローンパインドラッグストアを昔持っていたベン・ベーカーも、一軒買ったはずだな。ロサンゼルスから来た人間達も多分8軒は買っている。連中はロサンゼルスに運んでゆくつもりだったんだな。ところが、解体しちゃいかんと言われた。連中は、わしらがやったように半分にして移動させるわけにはいかんかった。それで、パングボーン地区、まあ人によっちゃノースローンパインと呼んでいるが、こっちで始末

しちまったんだが、今でもウイロゥモーテルに残っているよ。その連中が買った内の3軒がバスター・スィングローヴァーとドン・ブランソンに又売りされて、今でもウイロゥモーテルに残っているってわけさ。

ウイロゥモーテル

B：そのバラックは幾らぐらいで求められたんですか？

M：わしの記憶では、いくらで買ったかというと、ローンパインに運んでくる費用は別として、900ドルくらいだった。200ドルか300ドルで買うべきだったんだ。はっきり言える訳じゃないが、ベン・ベーカーが始めて買ったのには250ドルしか払わなかったと聞いたよ。

B：で、あなたは結局900ドルで購入された？ローンパイン地区では、収容されていた人間の方が、明らかにある種の物資を—時には配給となっていた物資を手に入れられたというので、敵意があったという噂がずっとありますね。戦時下だというので、オーウェンス・ヴァレーの住民には入手できなかったものをね。ミラー夫人、そうした状況へのご意見をうかがえますか？

M夫人：そう、その通りよ。収容所の中には店があって、戦争中ずっとあたし達にはまるで手に入らなかった物を、収容されていた日本人には買えるようにしていたのよ。長い間あたし達にはバターが手に入らなかったのは覚えている。そうしたら、誰かの撮った写真がロサンゼルスタイムズ紙に載って、その写真ではトラック一杯のバターがそこじゃ駄目になっていたのよ。間違いなく日本人には殆どいつでもバターがあったってわけね。勿論、あたしは、収容所のみんながバターを手に入れていたかどうかは知らないけど、店で買えたのよ。収容所には、お茶や煙草もあったわ。どれも、収容所の外では珍しかった物が色々ね。

B：あなたはしょっちゅう収容所に行かれていたんですか？

M夫人：しょっちゅうとは言ってないわよ。でも何度も出かけたし、その店で買い物をしたのよ。こちら側に住んでいて、収容所を訪ねた際に物を買ってきた人間を他に何人も知っているわ。

B：収容所が解体された時に、町の人の中に、日本人収容者がオーウェンス・ヴァレーに残ってしまうんではないかという恐れがあったかどうか、ご記憶でしょうか？

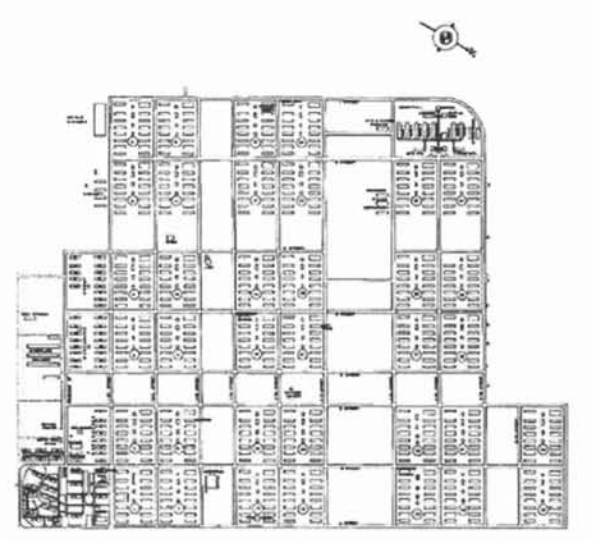
M夫人：いいえ、そんなことを耳にしたことは思い出せないわ。聞いていたけど忘れちゃったって可能性はあるわよ。でも覚えている限り、残りたがっている人はいなかったわね。多分、元々やって来た南の方に帰りたかったでしょうね。でも、あそこに収容されていた人達は良い人達だったと、本心から思うわ。収容所内の「交流の日」（Reciprocity Day）に出かけた時にも、殆どの人達が良い人達だったわ。尤も、こんな大きな企画を行っていた晩に、一度だけ、収容者の側にかすかな敵意が潜んでいると感じた事がありました。

B：収容者達が企画を行い、地域の人達を招待したんですか？

M夫人：ええ。娘はその頃まだ小さかったけど、娘をトイレに連れて行きたかったのね。でも、みんなが壁みたいに立ちはだかってわたしを通そうとしないのよ。ちょっと、狼狽えてしまったわ。その人達が少しも動いてくれない内に、婦人用トイレの列がしっかり出来てしまってね。その辺りにいたのは女の人達だけで男の人達はいなかったわ。わたしは通り抜けられなかったんで、結局列の後ろの方に行って並んだわ。でもそんな嫌な思いをしたのはその時だけよ。収容所で挨拶した人達は殆どが気持ちの良

い人達だったわ。

B：ミラーさん。奥さん。カリフォルニア州立大学フラートン校の日系米人オーラルヒストリープロジェクトを代表して、御礼を申し上げます。



ローンパイン収容所配置図

考察と結語

A：インタビュイーについて

ポーリーン・ミラーは、1906 年生まれ。インタビューは、1973 年 12 月 20 日に、カリフォルニア州ローンパインのノースジャクソン 330 番地で行われた。35 分のテープなどが残されている。

ヒューバート・E・ミラーは、1905 年頃生まれ。インタビューは、1973 年 10 月 4 日に、カリフォルニア州ローンパインで行われた（その先の住所は不明）。25 分のテープなどが残されている。

姓は同じであるが、夫婦ではない。どちらも、収容所建設時に 30 代半ばであった。インタビュー中にあるように、比較的 moderate な見方をしている。

・ポーリーン・ミラー：あなた方はこう推測するんでしょう―「奴らは俺達の敵だから、ここにいて欲しくはない」ってね。わたし達はただこう思っていただけ―「連中はここにいるんだから受け入れよう」ってね。恐らく、わたし達は、彼らの内いくらかは敵だろうと感じてはいた。でも、それでも、善良なアメリカ市民もいると当然感じもしたのよ。でも、判断するのはわたし達のする事ではなかったわね。

・ヒューバート・E・ミラー：そう、アメリカ人だった人間には好感情を持ったな、うん。わしらの生活様式と国家に賛成なら、日本人に悪意などこれっぽちも持たんよ。

B：「ジャップ」について

次いで、「ジャップ」発言であるが、本稿では、ポーリーン・ミラーのインタビューの中で、インタビュアーのアーサー・ハンセンが、「今年の夏の事ですが、ウォーターゲート事件の公聴会で、戦時中 442 部隊に属していたハワイ選出の上院議員のダニエル・イノウエ議員が、その場にいた弁護士の一人に「いまいましいちびのジャップ（damn little Jap）」と呼ばれたのは、不快に感じましたか？」と問うている。また、ヒューバート・E・ミラーとのインタビューの中で、ミラーが、「うーん、ジャップに手を貸した者もいくらかはいたかもな。でも、多くの者は、きっと手を貸さなかったろうよ。」と答えているが、この場合には、「ジャップ」は、「日本軍」を指して使っている。

本書の *Jap Camp*（『ジャップの収容所』）という書名が、圧力によって *Camp and Community* に変更を余儀なくされた事は、アーサー・ハンセン教授が述べているところであるが、renaming について、以下に興味深い事例を紹介する（インターネットで日系米人関係の情報には繁くアクセスするよう努めているが、この事例に関連してここで紹介するのは、何百とある記事の中の 3 件に留める。年月日は、アクセス時点や更新時点を指すのではなく、あくまで記事そのものの日付である）。

1－1）2006 年 8 月 14 日付けの**在ヒューストン日本国総領事館の邦文 HP** では、「平成 18 年度外務大臣表彰受章者決定」として、テキサス州関係では、スペースシャトル「ディスカヴァリー」に搭乗した野口聡一氏と並んで、サンドラ・チカコ・タナマチ夫人が表彰されたとアナウンスしている。内容は、次の通りである。

【・サンドラ・タナマチ氏は、テキサス州にある「ジャップ・ロード」という蔑称が付けられた道路の改名運動を始め、困難に立ち向かいつつも全米か

ら支援を取り付けてその道路の改名を成し遂げました。

・日系市民連盟(JACL）ヒューストン支部の理事として、日系人の地位向上と日米関係の友好促進に貢献されました。

・24 年間の教員生活を通じ、日系３世としての自身の経験を踏まえ、人種差別の危険性や異文化交流の重要性を子供たちに伝えてきました。その功績から、これまでに優れた教員が受ける数多くの表彰を受章しています。】

1－2）**在ヒューストン日本国総領事館の英文 HP** を見ると、説明は詳しくなる。

【日系三世のタナマチ夫人は、生まれも育ちもテキサス州。1992 年以来、夫人はテキサス州ボーモントにある通り「ジャップロード」（Jap Road）の名を改めるようキャンペーンを展開してきたが、地元の役人や住民の大きな抵抗にあった。改名を求めるキャンペーンの間、夫人は、脅迫や嫌がらせ、罵詈雑言や経済的圧力に耐えてきた。2001 年には、トマス・クワハラ氏と力を合わせる事になった。氏は、ルイジアナ州生まれのベトナム帰還兵だが、サンアントニオに向かう途中偶然通りの標識を見かけたのである。二人は、5 人からなる委員会を組織し、全米的規模で圧力をかけるキャンペーンに乗り出した。キャンペーンは、ビル・クリントン大統領を始めとする実力者からの支持を得た。2004 年 7 月 19 日に、長い聴聞会の後、ジェファーソン郡コミッショナー会議は、全員一致で「ジャップ」ロードの名の変更に賛成投票をした。この勝利は、フォートベンド郡やオレンジ郡における、同様な通りの標識を変えさせる事に結びついたし、後には、「テキサス州におけるいかなる公共施設や機関においてもいかなるエスニシティに対する中傷も禁ずる」という立法に結実した。】

註１：テキサス州ジェファーソン郡は、2000 年の国勢調査では、人口 252,051 人。内アジア系が 7,274 人居住する。ジェファーソン郡の中にボーモント（2000 年の国勢調査では人口 113,866 人）があり、さらにその郊外にファネット（2000 年の国勢調査では人口 105 名）がある。註 2：オレンジ郡は、カリフォルニア州のそれではなく、テキサス州のオレンジ郡である。

2）次に、「テキサスの“ジャップロード”は消えるべきだ―7 月 19 日の公聴会に向けて請願書に署名を求める」と題した、2004 年 7 月 13 日付けの **JACL の HP の記事**を紹介する。

【テキサスのボーモントの近く、ジェファーソン郡にジャップロードと呼ばれる通りがある。「ジャップロード」という名前は、この地に入植した日系移民の功績を称えるものだと言われる。我々は、この名を「恥辱」であると断言する。この地の歴史では、およそ 100 年前に日本からの移民がテキサスにやって来、いくらかはボーモント地区に入植した。彼らが開拓し耕し、テキサスを米作州にしたのだ。彼らは、学校や教会を建て、コミュニティーに貢献し、やがてその一部となった。この通りは、巷間伝わるところでは、そうした先覚者を称えて名付けられたというが、日系米人社会は、称えられているとは感ぜられない。1993 年に、地元の日系米人の住民が名前を変えようと言うキャンペーンに乗り出したが、他の住民はそれを拒んだ。日系米人の住民は、改名する権限を持っているのは、正式に郡コミッショナー会議のみだということに気付き、懇請した。しかしながら、ジェファーソン郡コミッショナー会議は、「「ジャップロード」というのは人種的中傷ではなく嘗てこの地に住んでいたマユミ一家を称えているのだ」という主張をまげない地元住民の好みを優先した。我々は、それを「侮辱」ととる。何年にもわたって、山ほどの手紙、その中には（テキサス州のものとは限らない）上下両院議員からのものも含まれているのだが、手紙が届き、郡コミッショナー会議に嘆願がなされたが、この尊厳を傷つける名は残った。1986 年 7 月 28 日に、連邦議会は、「ジャップ」という語は人種的に不快感を与える語であり、いかなる連邦所有の土地・建物にも使用を禁ずると述べた議会決議 290 を発した。しかるに、ボーモントでは、この侮辱的な名が残った。今年初め、テキサスの「失われた大隊」（Lost Battalion）（第 36 テキサス師団に含まれる）の退役軍人達が、ジェファーソン郡、オレンジ郡の郡コミッショナー会議に向けて、第二次大戦中に彼らを救うために、困難をものともせず、ある者は生命を

失い、ある者は肢体不自由者になった、日系米人のみからなる442部隊への賞賛の証として、「ジャップロード」と「ジャップレーン」（Jap Lane）の名を変えるよう促す書状を送った。それでも、恥辱は残ったままだ。到頭いくらかの動きがあった。何故「ジャップロード」が改名されなければならないのかについての意見を述べるために、全ての関係者、当事者が、テキサス州ボーモントで7月19日（月）にコミッショナー会議の審問会で意見を述べるよう招集された。たくさんの関心を持つ市民がこの審問会に参加するだろうし、我々としては、コミッショナー会議のメンバー達に、改名を迫っているのが地元のコミュニティーに留まらず、全米的な支持があるのだという事を示してやりたいのだ。「ジャップロード」という名は、その土地に住み、アメリカ合衆国のために闘い、地域社会を築くのに貢献した日系米人達の記憶を汚すものだ。「侮辱」に抗議し、コミッショナー会議を動かしてこの恥ずべき通りの名を変えさせよう。7月18日まで有効だが、以下の請願書に署名をお願いしたい。7月19日の審問会に提出される事になる。［以下、請願書のHPが記されている］】

3）最後に、2004年8月7日付けの**nwasianweekly.com の記事**を紹介しておきたい。

【我々は、テキサス州ファネットの不快な「ジャップロード」の名を変える事に費やした努力が、この地域の日系移民の遺産をまるで無視した新しい名になってしまった事に失望している。市民達は、投票によって、10年前に廃業したテキサス州南東部の有名なナマズ料理の店にちなんで、この4.3マイルの通りを「ブーンドックス通り」（Boondocks Road）と名付けたのだ。「ジャップロード」の名は、元々1900年代初頭にこの地に入植した稲作農家を称えるために名付けられた。郡コミッショナー会議は、今週初めにブーンドックスを承認してしまった。我々が先月、コミッショナー会議による「侮蔑的で人種差別的な「ジャップ」という名をとり除こう」という決議に拍手を送っただけに、この新しい名には落胆している。日系米人の活動家達が名前を改めさせようと闘っている間に、何度も何度も、「ジャップ」という言葉をとり除いてしまうのは町の歴史の一部を消し去るのと同じだと言われたものだ。しかし今となっては、この地に稲作を持ち込んだマユミ一家の遺したものを保存するのに関心のない者が、そうした市民の中には多数いる事がはっきりした。投票したジャップロードの住民170名の内、100名以上が、Mayumi Road、Japan Road、Japanese Roadといった選択肢もあったのに、Boondocks Roadを選んだのだ。

新しい名を選ぶ仕事に任命された者の一人のウェイン・ライトは、今週ロイター通信にこう語っている。「彼等（日系米人）は11年間も我々を攻撃してきた。彼等もそこから何かを学んで欲しい。この件については、勝者はいないんだ」また、ライトは、住民の中にはMayumiの発音ができない者も多いからとして、新しい名前を擁護している。

ライトの発言に苦々しさをかぎとるのは難しい事ではない。町の住民は、ポリティカル・コレクトネスのために通りの名前を変えさせられる事に面白くない気分を味わってきた。それで、彼等は、町の歴史を示しながらも、同時に抗議する者達の要求にたやすく屈したようにはどうやっても見られない名前を選んだのだ。

そうした些事に関わる必要はあるまい。

たくさんの者が、この何十年もかかったジャップロードの退屈な長話（saga）が到頭決着し、今は新しい名になったと思っている。ただ、我々はそうとは言えないのではと恐れている。テキサスのこの町の住民と日系米人社会との間の緊張は、直ぐにも消えるわけではあるまい。年月が傷を癒すだろうか？まだ、判断がつかないところだ。

尤も、日系米人の活動家達は既に、住民や訪問者がこの地域においてのマユミ一家を始めとする日本人農民の貢献を思い起こすことが出来るような「歴史を表す標識」を建てる計画を提案している。道路標識が無理なら、こうした標識が次善の策と言える。我々が希望しているところだが、それは、来るべき世代にとっての教育的な手段ともなるだろう。我々が以前に述べたように、ジャップロードという名を変えさせるために長い間闘ってきたJACLヒューストン支部や国中の無数の人々におめでとうと言いたい。ある集団全体を貶めるような言葉遣

いが、道路標識に現れてはいけない。だから、そうした道路標識が取り除かれたのは良い事である。ただ、この町がマユミ一家の遺した物さえも取り払わねばと考えた事については、悲しみを覚えるのみである。】

テキサスの日系人は、人口の1%に満たないが（テキサス州の日系人は、1990年の国勢調査では15,172人）、入植の歴史は古い。1900年頃、ヒューストン商業会議所と日本の総領事との話し合いの場で、稲作技術の向上のために日本人の協力が懇請された。1903年には、サイバラ氏率いる30家族が入植し、その地域の稲作は劇的な改善を見せた。1914年まで、入植者が日本から次々とやって来た。第二の波は、1920年頃で、これはカリフォルニアの反日感情を逃れてやって来た日系人であった。

さらに、大変良く知られている挿話であるし、2）の**JACL**の**HP**の**記事**にも顔を出すが、1944年10月30日、442部隊が、「失われた大隊」と呼ばれたテキサス大隊（第36師団141連隊第1大隊。テキサス州兵を中心に編成）を救出している。211名のテキサス大隊を救出するために、そのほぼ4倍が死傷したという激しい戦闘であった。ちなみに、サンドラ・タナマチ夫人のおじも、第二次大戦で戦死している。テキサスと日本人、日系人との関わりは薄くはないのである。

（2006.9.15）